

池田文書の研究 (50)

医師の書簡 (その9)

池田文書研究会

[155] 浅岡清・さだ・清旦の書簡 (前承)

8 明治18年1月2日 (1)

謹 奉賀新年

明治十八年一月一日 朝鮮国済物浦 浅岡清

池田謙齋様

時下厳寒之候ニ御座候処、御惣容様被為揃益御清福御超歳被遊御座欣喜奉恭賀候、次ニ少子無事消光加年仕候間乍憚御放念被下置度候、然は昨年中ハ種々蒙御厚情、別して兩人共御世話様ニ相成難有奉存候、御礼申上度候、且昨暮ハ入費不足諸払ニ差支ヘ拜借仕度様先便申来り置其辺も曾テ御願申上置度之処、今般之事件にて出張ニ相成候、小生ハ徴兵にて卅一日出発之積リニテ廿四日より事務取調仕候処、廿五日出張之事ニ相成、廿八日出帆卅一日当地え着仕候、少子ハ明後四日麻浦ト申出出張仕候、明日大使京城え向ケ出発ニ相成候、今日漢ノ重役一名当領事館へ被参候、如何之談判ニ御座候哉、一向相分り不申候、多分十五年之様ノ事ハ有之間敷ト奉存候、少しハ軍人之仕事も御座候半ト奉存候

○当地物価之高価ト土人之不潔ニハ実ニ驚入候、右申上度混雑之際書外重便ニ申上候、時氣折角御保護奉祈上候、早々頓首

一月二日夜八時認メ 浅岡清 拜
池田先生 尊閣下

9 明治18年6月3日 (2)

五月四日御発之御状本月一日着奉拜展候、時下稍夏熱相催候処御惣容様被為揃益御壯健被為渡奉拜舞候、次ニ少子無異送光罷在候間乍憚御休神被下度候、此度ハ御多忙中御細書被仰付難有奉存候、毎度留主宅万事御指揮被下置奉恐入候、家族共も無事、小僧も神田小学校并ニ小野沢学校へも通学

仕候趣、尚宜敷御差函被下度候、仰之通り伊東大使⁽¹⁾御帰朝ニ相成当地兩兵も撤去之事ニ相成候趣、併未タ何等之様子も相見不申、八月下旬ニモ相成候半ト奉存候、尤も此程小倉よりの文通ニハ帰朝後は速ニ交代之運ニ相成候半との事ニ御座候得共、二ヶ月位ハ相掛り可申ト奉存候、弥長ク相成候ヘバ帰省ニテも相願候積リニ御座候、扱又四月始より今町姉⁽²⁾出府仕候由、長々御役介ニ相成候半宜敷御願申上度候、同人え小倉より送り金留主宅渡し、残額ハ悉皆御渡し被下候趣委細承知仕候、先便申上置候本年六月相渡し候年賦金川本・合原・大塚や之三軒分御渡し被下候様ニ申上候筈ニ覚へ居申候、併し大塚屋分ハ先日合原氏より御談シも有之扣へ置候様との事、合原・川本の分ハ御遣し被下度候、小倉より送り金ニテ不足ニ候ハ何卒御取替被下度候

○以来仁川 定期航海も一月ニ兩度ニ相成候趣ニ御座候、尤も長崎迄テ往復との事ニ御座候

○留主宅も愚妻母兩人共我僕にて勝手而已申居候間不都合無之様御説諭被下置度候

○去月七日附にて差上候処最早御落手被下候半ト奉存候

○去ル四月十八日支那惣領事ノ従者孫田、当兵ニ刺傷サレ死亡セシ件ニテ理事審事録事等出張ニテ明日より裁判相開キ候由、就てハ診断上ニ付昨日も今日も照会有之多忙にて困却仕候、夫ニ前月諸表も此度之船にて差送候等にて寸暇も無之候

○当地気候正午昨日ハ八十二度⁽³⁾、今日ハ雨正午六十五度寒暖変換甚シク感冒症去月ハ七十名も有之、天然痘も四月来十四五名罹り三人死亡仕候、依テ四百人斗ニ種痘セシニ五六十人出感之者御座候

○梅毒ハ当地ニ甚シク様子ニ御座候も兵人夫等に

も有之困入候

○近頃ハ午后ハ余程暑氣ヲ催シ、随て臭氣も甚敷候間散歩も出来不申閉口仕候、色々申上度候得共時氣御伺御返答迄ニ如此書外重便万々可申上候、早々頓首

六月三日

浅岡清

池田先生 尊閣下

- (1) 伊東大使 伊藤博文全権大使、明治18年4月17日清国李鴻章と天津条約締結。
- (2) 今町姉 越後今町(見附市)に住む入沢恭平の妻ただ(唯)。
- (3) 華氏82度は摂氏27.8度、又65度は摂氏18.3度に当る。

10 明治 年11月20日 (1096)

謹啓、本日は蒙御尋殊ニ愚妻御高診被仰付難有仕合ニ奉拝謝候、且又御奥様より結構之御品被仰付難有拝受仕、愚妻よりも厚ク御礼申上候

一、御立後別紙見当り停車場へ持参仕候得共最早御乗車ニ相成候間、直チニ郵送仕候、御用之御書面ニ御座候半奉存候、取急酔中乱筆御明読奉希上候、早々敬白頓首

十一月廿日 午后七時投函

清 拜

池田様 尊閣下

11 明治 年2月14日 (40)

御^(ママ)殊大の御中より早速の御返事戴き難有拝見申上候処、其皆々様にも御機嫌さまよく被入られ候よし万々御目出度存上まいらせ候、遠方の事にて御聞合申上候も自由ならず故御氣に入候や如何と申暮しまいらせ候、行届かぬかちにハ候得とも何成とも当所へ御用も候ハ、仰越戴き度候、此度仰越の書付差上候、末なから御隠居様御初皆々様へくれくれよろしく仰上られ戴き度願上まいらせ候、まづは御返事迄申上候、目出度かしく

返々も時かふ折角々々御いとひ遊し候様願上候、またまた殿様の御しかりとは存じぬにハ無是候得とも、当所にて大はやりのきぬ小くらか申帯にて夏ひとへにてしめ候品誠に見事のものに候が如何候や、おあつらい被遊御思召も候

ハ、私し小くらへ参らぬ先御申越戴き度、百目仰付候得は見事の品出来候向に承り申候、まづは御伺ひ迄、以上

池田御奥様 参らす 浅岡さだ より

二月十四日

12 明治 年8月27日 (7)

今廿六日午前八時御認、同午後二時拜見仕候、再比より残暑甚敷候得共御揃ますます御機嫌能数々御目出度御悦ひ申上候、ベルリン行御状早速相たのミ可申候、御安心可被下候、小生義も廿日前後ニは是非参上之積リニ心組ミ罷在候処、昨今少々不快引籠り今日迄も床の上ニ罷在候、此分にては当月中ニは参上可仕とそんじ候間延引御用捨奉願上候、過日申上候證書も其節持参、利子等之義も可申上候間左様御承知被下候、乍末御娘子様方へ宜敷奉願上候、家内も宜敷申上呉候様申出候、先は御返事迄ニ、余は追て参上迄申残候、目出度かしく

八月廿七日

浅岡清旦 拜

池田御隠居様 返し

13 明治 10年3月9日 (14)

木^(ママ)日后六時半御認之御書為送朝八時^(ママ)当着拜見仕候処、蘭高社中云々承知仕候間早速罷出候処、通弁木下亭氏出京中ニ付昨朝十時罷出社長ニ面会、同人通弁にて右件々承知候得共小生ニ御取計ひ出来兼候事ニ付即答ニ及び候処、明日迄ニ右本国より之書面^(ママ)本 訳いたし小生宅迄届ケ可申候間早々新潟へ聞合呉候様申事ニ付帰宅仕候、然ル処今日十一時頃右書類参り候間、右之書面早速竹山君迄書留郵便ヲ以御送り申候間左様御承知可被下候、尤小生よりも池田様御留守宅より一昨日御文通云々も申上候、過日之御文通ニ書面返却之旨御申越ニ付即過日之蘭高社より之書面御廻し申上候、御入手可被下候、約定書四件程変替への事ニ付、近々御宅へ御頼ミニ相成り可申奉存候、新潟県え事ニ付小生代筆にては困却仕候間右も申送り候、書余右迄、余は近日出京万可申上候、早々頓首

三月九日 一時過

池田様

浅岡清旦

御隠居様

二白、誠ニ御無音打過恐入候、奥様へも宜敷奉声可被下候、池田様も宮様御同便鹿兒嶋嶼へ御出張之趣過日横浜新聞ニ相見へ申候、全御出張ニ候哉奉存候、清事も本月四日出張之趣娘より一昨日申越し、尤戦地ニは無之天津迄と有之候、いつれ京大坂近辺と存候、以上

14 明治10年6月27日 (11)

(封筒表) 東京浜町老丁目拾番地

池田謙齋様 行 用事

(消印 横浜・武蔵六・二七・に)

(消印 東京・十年六・□□・も) (切手二銭)

(封筒裏) 封 丑六月廿七日午前十一時発

横浜本町六丁目 浅岡清旦 上下封印

追々暑気増加切角御自重奉祈上候、以上一翰拝呈仕候、時下暑気日々増加之処、御一同様御揃万々御機嫌能被為渡奉恐寿候、扱去月三十一日ニは不計参堂種々御馳走御戴毎々御手数相かけ奉恐入候、其後御礼状も差出不申甚々不本意之段御仁免奉願上候、一昨廿五日戦地清より久しふりにて書状到着、出張後は日々かけ歩一日も引籠り不申趣申参り安心仕候、何方様へも一書も不呈候間宜敷申上呉候様申参候、戦地にては世間之事は少々も知れ不申よし、過日承候ニ池田様も京都か東京か分り不申候得共御歸り奉申候得共、くわしき事は一切知れ不申序ニ申送り呉候様申参り、此度斗りは手紙之届ケ先記シ参り候間、今日始て戦地出張後の返事差立申候、過日之御礼奥様へも宜敷御伝声奉願上候、此頃は池田先生は西京ニ御滞留ニ被為入候哉、又は長崎へ御出張ニ相成り候哉、御家来歸り候得は御序ニ御模様知度候、先は右御礼旁清より之伝書申上度、早々以上

六月廿七日

清旦 拜

御隠居様

別紙申上候、北越よりも教師御出立後は書面参り不申候間、今日同所へも壺封久しふりにて清よりの書状ニ付申送り候、清事も本月三日軍医副拜命之趣為知参り候間御序ニ申上候也

15 明治11年3月29日 (12)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町拾五番地

池田謙齋様 御直披

横浜本町六丁目 浅岡清旦

(封筒裏) 封 三月二十九日

拜呈、益御機嫌能被為渡候条奉恐賀候、扱過日は御転居⁽¹⁾之趣御報知難有、翌朝恐悦状差上申候間御入手と奉存候、其後出京仕度心かけ居り候得共、何分腰痛発し引籠り罷在候、且小生参堂可願上候之処、病中ニ付無抛以書中奉願上候共、田中正蔵と申仁小生国許在須崎浦之医生にて昨年来出京相原塾等ニ罷在候事にて、昨今は南佐久間町ニ罷在候よしにて尊宅へ入門仕度小生より願上呉候様昨年来両度も嘶なし候処、昨十一月中高沢英祐子参上候節えつい失念仕候処、過日御移転御報知之三時頃より東京より参り居り、是非小生出京之節願上呉候様申候事ニ付承知いたし候旨にて、今夕刻帰宅仕候跡へ御報知有之候処昨日又々書面ヲ以申越し、小生不快ニ候ハ、転書ヲ以願上呉様申事ニ付無抛乍失敬以書中願上候義ニ御坐候、何卒当人参上仕候ハ、御逢ひ被下御入門之義願上候、尤月捧等は不申及何事も御規則相守り申候間宜敷様奉願上候、先は右迄同人より御聞取奉願上候、書余不日参堂御厚礼可申上候、早々頓首

三月廿九日

浅岡清旦 拜

池田大先生 坐下

二白、御惣容様へ宜敷奉願上候、以上

(1) 池田謙齋は明治11年3月20日浜町1丁目10番地より駿河台北甲賀町15番地へ移転した。15番地は12年4月頃9番地に変更される。

16 明治11年8月10日 (15)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町拾五番地

池田謙齋様 平信

横浜本町六丁目 浅岡清旦

(消印 横浜・武蔵・八・一〇・□) (切手二銭)

(封筒裏) 上下封印 八月九日午前

(消印 東京・十一年八・一〇・へ)

昨九日御染墨今朝拝見仕候、酷暑之候益御機嫌能被為渡奉恐賀候、扱過日は大勢罷出いろいろ御馳

走様ニ相成り毎々恐入候、清始メ一同長々御世話戴き其内御礼旁参上之心得にて終々今日迄も御礼状も差上不申、甚々不本意平ニ御仁免奉願上候、娘出立之せつ帯一筋御預け置申候よし御文通被下承知仕候、小生近日中出京可仕候間其節迄御預り置奉願上候

○先生御義俄ニ北越へ御出立⁽¹⁾相成り候趣大暑中にて無々御困却と奉察上候、此度は清始メ山崎様も御出ニ相成り居り候間新潟にて御集会え事と奉愚察候

○御産後奥様御小児⁽²⁾様暑サの御障りも無御坐候哉、乍憚宜敷過日之御礼奉願上候、家内よりも厚く御礼申上呉候様申出候

○清より端書老葉本月六日出昨日朝入手仕候、熊之森にて山崎様始メ於あひ様御養子披露旁両三日止められやら四日ニ新発田へ着之積りと申書面参り、未任処よりの着状は参り不申候、先は御返答旁過日之御礼申上候、余は近日出京御厚礼申上候、拜略早々かしく

八月十日朝

(1) 明治11年8月30日より11月9日まで明治天皇北陸・東海巡幸、池田謙斎供奉。

(2) 明治11年5月19日池田謙斎妻いくは次男次郎出産。

17 明治 年7月7日 (13)
(封筒表) 池田大先生 別封在中 浅岡清旦
拜呈、益御機嫌能被為渡候条奉恐賀候、扱其後御無音打過恐入候、御不快追々御順快被為在候事と奉拝察候、一寸参堂可致之处、五日間例の発黄病増進廻舌□等にて少々腹痛候條過日吐き候処、腹痛は無之候得共昼夜之カユミ誠ニ困却仕候、今日も床中ニ付、乍失敬以書中奉御伺候、別封過日福岡表へ御容体申遣し候処、昨夜廿七日附書到着、御届ケ申上、且御容体深く御案事申上候間、早々再便にて委細申送り呉候様申参り候、尤行違ひニ相成過日壺封追々御快身之趣は申送り申候間、昨今甚安心いたし可申と存候得共尚両三日中ニ御容体追々御快方之趣申送り度候間今日御伺候上と存候得共、荊父も籠り中ニ付乱文ヲ以奉御伺度、書

余御口上にて御様子此者へ御報奉願上候、早々頓首

七月七日

ノ

池田大先生 別封相添 清旦 百拜

ノ

[156] 入澤海民の書簡

入澤海民は医師、東京にて開業、池田謙斎の父健蔵の二番目の兄貞意(貞蔵・医師)の息子。

1 明治 年6月18日 (1246)

存外御無音仕候段奉多謝候、然は小疇氏小児只今診察仕候処、脳膜炎之初期と愚察仕候間、恐縮之至ニ候得共何卒今日中御都合次第御来診之程相願度、尚委細は主人よりも可申上候、願用迄早々如此御坐候也

六月十八日

ノ

池田先生

海民 拜

ノ

[157] 入澤時廣の書簡

入澤時廣は医師、東京にて開業、池田謙斎の父健蔵の三番目の兄章純(章蔵・医師)の息子。

1 明治 年11月27日 (749)

拜呈、陳ハ日増ニ寒氣相嵩候処、益御清榮奉賀寿候、扱 針ヶ谷〔保齡三十七年〕ナル者五年已前より漸々相重リ慢性胃カタルニ罹リ、軽ナル時ハ嘔吐ナシ、重ナル時ハ必ス食後嘔吐アリ、二三年已前より種々之水薬試用候テモ効ナシ、発作之際蔞酸セリウム四グレイン乃至六グレイン、次硝酸ビスミット二十グレイン、桂子皮二グレイン一日三包宛試用候処鎮嘔セリ、就テハ本人是非大先生之御治療願度旨申出候ニ付、差出候間宜敷御治療被成下度奉懇願候、右取急き認勿々如此御坐候、不備

十一月廿七日

入澤時廣

池田大先生 玉坐下

尚々本人帰省之節ハ御手数恐入候得共、処方書

御附与被成下度奉願上候，已上

2 明治 年4月27日 (1248)

拜啓，陳ハ不取敢以代筆御報導し申上置候処，本月廿二日午后九時四十五分ニ風上四五軒先より出火茅家統ニて焼失家財其他殆ト丸焼同様，実ニ困却罷在候間尚御報知申上候也

但仮住居極次第出京御拜謁之上巨細可申上候也

四月廿七日 時廣 拜（入澤の角印）

池田大先生 呈玉坐下 葉室

[158] 岩佐純の書簡

侍医。明治初期ドイツ医学導入に貢献した。岩佐純の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に12通掲載に付省略。

[159] 寛道の書簡

寛道の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年7月10日 (3178)

謹啓，時下暑威之候ニ候処，御一統様倍御清康ニ被為有候条大賀此事ニ御座候，陳ハ尔来私事ニのみ拮据いたし居，自然通信も打過多罪百舌筆頭ニ難尽候，伏て御仁免ヲ奉仰候，養父之疾患モ漸ク全快候ニ付，去月初旬開業仕，尔後患者も追々増員之模様ニテ当今ハ毎日外来二三十名ニ及ヒ，可ナリ多忙ニ御坐候，午後ハ五七名ノ患者廻診之為日ニ二三里，遠キハ五六里モ奔走仕，是レニハ殆ト閉口罷在候，到底都鄙之比較ハ相成不申候へ共，僅二三十名ニ足ラサル患者ニテ日々之動作如斯有様ニ御坐候，不省之吾々ニハ至当之事ト自察いたし居候へ共，何分身薄弱ニテ如斯動作将来覚束ナク被存候間，来年ハ柏崎へ寄留開業致度心組ニ御坐候，御承知之通り同所ハ北越之一小都会ニ殊ニ在々迄平坦之地ニ御坐候間，施業上幾分便益有之哉モ被考候，迂生義昨年来閣下ノ膝辺ニ在リテ夙夜懇々御教示ヲ蒙り，明瞭之点も鮮ナカラス，殊ニ今回ハ以前ニ比スレハ一層郷党ニ信用モ厚ク相成候様ニモ被見受，是偏ニ閣下之御蔭ト日夜拜謝罷在候，入門以来万端不淺御厚情ヲ蒙り再

生之御厚恩万分ノ一タモ報スルナク，自由ケ間敷御暇相願，実ニ謝罪之可申上様も無御坐，平ニ御海容ヲ奉懇願候，右御礼迄，匆々

二伸，中頸城川浦村下鳥一郎長女病氣之義ニ付，過般一郎より人ヲ以テ治療之方法閣下え伺上候処，生方へ罷越一応診察為致，然ル上方向相定メ可申旨御台命有之候趣キ，不省之私え閣下之御口達ヲ以テ患者廻し被下候段如何斗リ難有，実ニ一身之名譽ニ関ル事ニ御坐候間，慇懃ニ診察仕候，未タ発作之状体ハ診察致不申候へ共，是レ迄之容体ニ由レハ如何ニモ癲癇症ト拙診仕候，併し脳中器質变化之徴候モ無御坐候，周囲系ニモ是レソ病原ト誌ム可キ障碍も無之，只原因ト被疑候モノハ齶歯痛ニ有之，是レハ三年来下両第一臼歯時々劇痛ヲ発し甚々敷トキハ三四日も絶食等之事有之由，已ニ一歯ハ僅カニ歯根ヲ残スのみニ有之，依テ二本共委ク拔除致し候，服薬ハ予防之為メ臭剥剂投与致置，先是レニテ暫ク輕過ヲ見定メ候上，硝酸銀或ハ亜鉛花等試ミ度存意ニ御坐候，尚昨日も閣下之御命令有之候間，近日患者召連度様中頸城郡立ヶ崎村より申来り候，小細ハ後便ニて申上度，頓首

七月十日

寛道

池田様 閣下

[160] 寛世の書簡

寛世の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年 月21日 (3309)

朝暮冷気相催候，過日は態々御来車被成下奉万謝候，荊妻義も御厚庇ヲ以漸次快論ヲ得申候，尤泄液之分量一兩日前より又々多分ニ候由。洗滌剤ハ矢張鉄液注射候処，連続前剤ニテ宜候哉，又ハ他方に転ジ可然哉，将亦小拙モ御教示之通昨日より皓丸ニグレイン，水一オンス之割ニテ注射候処，大に効驗相顕レ候，右皓丸剂格別刺激も無之注射後少々粘液増加ヲ覚へ候ノミニ御坐候，就テハ皓丸之量ハ如何致可申哉，只今之分量ニテ可然哉，将一グレインモ増加致し可申歟，兩人共薬方

之思召も候ハ、御示教被成下度、不憚御繁劇以書中此段御相談申上候也、余ハ拜芝万可申述候、早々拜

廿一日 寛世
池田教頭 閣下

[161] 文圭の書簡

文圭の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年8月11日 (3340)
拜呈、昨日は浜尾令閨御診察被成下奉拝謝候、尔后今晚迄ハ先異状も無之、昨夜は何之安眠も出来申候、体温脈搏左之通ニ御坐候、此段卒と申上置候、早々頓首

午前七時 三十九度同時キニー子 一・〇 頓服
午後二時 三十七度七分
全 七時 三十九度三分
脈搏ハ八十ヨリ九十迄

二伸、今朝より月経有之候、明朝迄ハ如命キニー子相用候所存御坐候
八月十一日夜

2 明治 年9月6日 (3245)
謹啓、一昨日は浜尾令閨御苦勞被成下、御陰ニ昨日より今朝ニ掛熱度大ニ降り脈搏も七十四五ニ相成他ニ変症も無之、一昨夜灌腸后硬便一行有之、其後ハ按腹いたし候ても下腹之痛も無之、小便も試験いたし候処、蛋白質ハ無之候、依て先ハ快方之容体と愚考居候、此段卒と為御知申上候、草々不具

九月六日
四日午後六時 三十八度三分 但シ御来診之折
五日午前七時 三十八度五分
全 午後一時 三十八度
全 七時 三十七度五分
本日午前七時 三十七度二分

池田大先生 侍史 文圭

[162] 文齋の書簡

文齋の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年6月5日 (3252)
向暑之際ニ候処、先生始御家族御一統倍御清祥大賀不斜自来御養保奉専念候、私義先生之御蔭ニ抛り病氣本復、頃日は病家杯へ時々廻り居候、乍畏憚御安堵被降度、尚此上とも御見捨なく諸事御添心奉懇願候、右之御疎闊之罪を御詫申上候のみ、委細万々可申候、乍末奥様へよろしく御鳳声願上候、草々跪白
六月五日 文齋 拜
池田先生 足下

[163] 良齋の書簡

良齋の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年9月6日 (3266)
御当家病者今朝九時頃一診仕候処、諸症緩解体温モ常度ヨリ降て九十七度⁽¹⁾ 凡て前日ニ比スレハ患なきが如き景況ニ御坐候、右は全く一種之間歇熱と思考仕候間、本日はキニー子六グレインを分服為致置申候、明日は発作前更ニ拾五グレインをリスリン丸トシ、分テ二包トシ二時毎ニ壱包ツ、発作一時前マテニ用尽すべくと思考仕候へ共、如何之者哉、御一診之上御示教奉願候、本日御来診まで御待可申上之処、不得止事故有之候ニ付、乍略儀以書中申上候、不悪敷御憐察奉願候也
九月六日 良齋 拜
池田先生 机下

(1) 華氏97度は摂氏36.1度に当たる。

[164] ベルツの書簡 Ervin von Baelz

ドイツ人医学教師。明治9年来日、日本の医学教育・医療に貢献した。ベルツの書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に10通掲載に付省略。

[165] ギールケの書簡 Hans P.B. Gierke

ドイツ人医師。明治10年3月来日。東大医学部解剖学教師。13年満期帰国。

1 1878年（明治11年）9月2日 (3371)

拝啓、先日日光からこちらへ戻って参りました、先週の土曜先生を訪問したく加賀屋敷までただちに参りましたが、会議がおありだったようでお話しすることができませんでした、本日月曜にも先生をお見受けいたしませんでしたので、ご多忙の中ご自宅でもお会いすることができないのではないかと危惧し、できれば個人的にお話ししたかったことを手紙で連絡申し上げます、つまり私が健康にならなかったということです、非常に残念なことに私は病気のまま帰路につかなければなりませんでしたが、先生がまだ日光へいらした際私がまだ健康ではなかったことをおぼえていらっしゃいますか、たしかにその時は自分自身で少し回復傾向にあると感じましたが、しかしそれはちょっとした変化にすぎませんでした、出発されたほぼ直後とてもひどい再発にみまわれました、もしかすると少し長過ぎた散歩によって引き起こされたのかもしれませんが、残念ながらとてもとてもひどく病気だったので八月二日から二十日までベッドから起き上がることができませんでした、定期的な病気の進行に気付くこともなく、その後多少はよくなりました、八日間にわたり何も食べなかったか、またはごく僅かしか食べることができなかったため、私の体はどんどん衰弱していきあり得ないほど痩せ衰え、気力体力ともに全くありません、ちゃんとした食料を見つけることができなかったため、日光は私にとって良いところではないと感じました、もっとも毎日宇都宮から届けられる牛乳を法外な価格で手に入れることは可能でしたが、しかし日光にくるまでにしばしば酸っぱくなっていました、このようなわけで是非戻りたかったところですが、一時はあまりに体調が悪くひどくぐったりしており、とても旅立つことはできませんでしたが、それから東京では熱になやまされ、あげくの果てには自宅が工事中でしたので、どこに滞在したらよいかのかわかりかねました、こ

のようにして九月に入ってから日光におりました、そしてついに現在、ゆっくりとはしていますが明らかな回復がうかがえはじめました、嘔吐することなく少し多めに食べ物を摂取することができ、いくらか力もでてきました、今回の回復は東京にいる時の方がより顕著で、体が毎日必要とする栄養をほぼ摂取できるようになっています、しかし残念なことに以前の損失は非常にゆっくりとしか再び埋め合わせることができません、現在も心身ともに疲れて弱々しくしております、上野から加賀屋敷までの道のりはひどく骨の折れるものでして、昨日それに挑戦した際に気絶するほどでした、頭脳労働はいまだに全く不可能です、1時間ほど新聞やそれに似通ったものなどのごく簡単な文書を読んだだけでひどい頭痛がし、目はちらつき、動悸がおきるなどの症状がでます、胃の方はといえば、何と言いますか多少はよくなっているのですが、いつになっても嘔吐がやみません、特に食事の際または食後に絶え間なく吐き、その他のほとんどの時間にもよくありません、このたびお手紙を差し上げましたのは、さらに十日ほど休暇をお許しただけますようお願いするためです、ご存じではあると思いますが、私の講義を行うことができません、今の私にとっては不快感とげっぷと吐き気に嘖まれることなく、三時間どころか一日一時間ですら話すことはほとんど無理とも言うべきものです、現在仕事をしたところで（と申しましてもそれにはとても耐えられそうにありませんが）、差し当たって健康状態が全く回復しないことも考えられることです、数週間にわたって負担の多い仕事を続けるのでしたら、結局は再び寝込むことになるでしょう、他方であると数日だけ完全に安静にしていることで非常に健康な状態を取り戻せるのではないかと現在期待しております、現在また新たな療法を一度試しており、非常に厳しい食事療法を守り自分自身の力に相応した運動をしようと思っています、それゆえ近日中の全快を確信しており、それから全力で学校に打ち込みたいと思います、健康であったとしても十日はやはり必要で、それゆえこの衰弱に苦しんでおります、授業を中断するのは非常に心苦

しいのですが、なにとぞご配慮のほどよろしくお願いたします、とりわけ現在我々の施設が非常に大きな、また痛ましい損失に直面したところで、五番アカデミーは四時間にわたってアールブルク氏が担当することとなっており、アカデミー自身今後いくらか少なくとも授業を行うことでしょうか、しかし私としてはランガード氏⁽¹⁾とシェンデル氏⁽²⁾とお話ししたく、彼等の分野での授業時間をいくらか多くすることをお願いし、後でこちらが解剖学の授業を時間割よりも多く行うこともできます、また学生にも今後しばらくの時間を私の記憶を前もって書き写し、印刷用に準備することに使うよう要請してみるつもりです、そうすることで後々より早く講義が進むことでしょうか。私がこのように自分の願通りに立場を埋め合わせることができないことで、きわめて悲痛に感じているとお思いのことでしょうか、しかしこれは変更のしようがありません、私は十分不幸で気分も絶望した状態です、人生において今回ほど気をめいらしたことは滅多にありません、しかし近々よりよい時がくることを毅然と願っております。明日またはあさって、今日ほど気分が悪くない際にはもう一度伺うようにいたします、敬具

七十八年九月二日 東京上野

ハンス・ギールケ

(大塚恭男訳)

(1) ランガード A. Langgard. ドイツ人医師。

明治8年より14年迄東大医学部製薬化学教師。

(2) シェンデル L. Schendel. ドイツ人。明治

7年より15年迄東大医学部数学・物理教師。

2 1880年(明治13年)5月下旬 (337)

拝啓、三年以上におよぶ東京医学校での私の活動を通してこの施設に対して非常に興味、はっきりに申し上げますと、強い愛着を抱くようになりました、ドイツへ帰国するにつきこの興味をのちのちまで残すためにも、医学に対する友好関係を示すため、現在退職に際してなんらかの方法でこの私の友好的な心情を表明したいと強く願っております、しかしながら残念なことに私の持ち合わせる

手段はわずかなもので、また私の善意につらうものでもありません、それでもやはり施設に何か記念になるようなものを提供できたらと思ひ、何かそれ自身に価値があり、また今ちょうど日本で非常に有益なものをと考えております、つまり購入するとしてももう不可能か、または幸運に恵まれないと入手することのできないいくつかの大きな全集、雑誌と思っております、施設の付属図書館は数年前からフィルヒョウとヒルシュによる編集の年報をとっています、私は現在コンスタッチェ年報の名前のもとに一八七一年にまでわたるその以前の巻を全て所有しております、実際のこの時期に近代医学の全体が発展していったので、これらの報告の中に現行の医学の成果に関する論文と完全に精密な概要が掲載されています、全巻を欠ける巻のないよう入手するのは非常に難しいことです、私自身も幾度かの幸運に恵まれて手にいたしました、ですからいままでこれらの巻を貴重な宝として保存しておりましたがちょうど私にとって大切に価値のあるものですので、今後年を経る毎にその有用性が高くなるであろうこれらを医学に記念の品として残していきたいと思ひます、一八七三年の巻まで(その巻からは学校ですでに蔵書しているかと思ひます)で六十七巻になります

第二に医学校に解剖学、生理学、発展史に関する年報とともに『ホイレ・プフェンファー有理医学誌』を提供したいと思ひます(学校にはすでにシュワルベ編によるこの報告書の続編があります)、こちらの本も同じく全巻揃っており、すでに貴重本となっていて全十五巻です

第三に『ヴェルツブルク医学誌』十八巻が九巻に装丁されたものを医学校に寄贈したく願ひます、どの本も簡素ではありますがよく装丁されています、敬具

東京 一八八〇年五月下旬

ハンス・ギールケ

(大塚恭男訳)

[166] レリレルの書簡 T. Leriler

レリレルの詳細不明、書簡の内容より医師と推

定した。

1 年 月 日 (3389)

拝啓、検査のためにこちらへお送りくださいました患者のオノマコトさんは噴門付近の食道に腫瘍をわずらっています、七番ゾンデは簡単に入っていき、またいくつかの非常にはっきりとしたガン細胞をその場所に発見することに成功しました、この患者には毎日もしくは一日おきに七番ゾンデを挿入し、五分から十分おくといいのではないかと思います、患者はここ二か月間で非常にやせたので、万一起こりうる手術による臓器の完全除去は考えられません、敬具

T・レリレル
(大塚恭男訳)

[167] シュルツェの書簡 E.A.W. Schultze

ドイツ人外科医。明治7年ミュルレルの後任として来日。東京医学校・東大外科教師。10年帰国後翌11年再来日。東大外科・眼科教師。14年4月帰国。日本にリスター防腐法を紹介した。シュルツとも称される。(1844-1925)

1 年 月 日 (3382)

東京 北甲賀町一五番地 池田先生
拝啓、私の昨年不在時に同僚らにより決定されたことですが、我々の仕事に関してドイツ語で毎年専門的な報告書を作成することとなりました、このような報告の第一段が今年刊行されるとのことで、内容としてはある仕事の発展の話と、いくつかの計画によって詳しく説明している記述それ自身を除いて、それぞれの教師による研究分野における貢献となるようです、すぐに報告書の作成に着手するために、このような報告書の発行についての意図をその当時東京大学の医学部で公表されたということなので、すでに申しました通りのこの報告書の印刷代を負担していただけるかどうかをこの書面を通して伺いたいと思います、ご回答のほどよろしく御願いたします、敬具

A・W・シュルツェ
(大塚恭男訳)

[168] ショイベの書簡 Heinrich Botho Scheube

ドイツ人医師。明治10年京都府療病院（京都府立医大）の内科・眼科・婦人科の教師として来日。15年帰国。(1853-1923)

1 年 月 日 (3381)

拝啓、東京脚気病院の上司の皆様をお願い申し上げます

一、もしできましたら本年八月の間、現地の病院にいる全ての患者の監視と診察を行うことをご了解ください

二、お手元にお持ちの疾患に関する情報誌、統計、解剖報告などをこちらにご提示ください

三、この期間に現地の病院で行われる全ての解剖は私自身に行わせて下さい、また要望によっては死体の臓器、および臓器の一部をさらなる顕微鏡での研究にお貸しください

私の願いを認可または不認可する件で、ついに待ちに待った最終的な回答を伺いたくお願いいたします、もし上司の皆様が私の申請における三点すべてにおいてご理解いただけないとのことでしたら、その場合にはこちらにほとんど成果がもたらされないことと存じますので、現地の病院で使用するための脚気の専門的な研究に来る夏休休暇を投げ、私の計画をまったくもって帳消しにいたします

(大塚恭男訳)

[169] チーゲルの書簡 Ernst Tiegel

ドイツ人医師。明治10年来日。東大医学部の生理学教師。16年帰国。

1 1881年（明治14年）7月9日 (3383)

東京医学校チーフ 池田先生

拝啓、申し訳ありませんが風邪をひきましたため、本日行われるディプロムのプレゼンテーションのパーティには伺えそうにありません。祝贺会への不参加に際してまことに申し訳なく思ふ次第であります、敬具

八十一年七月九日 E・ティーゲル
(大塚恭男訳)

[追記]

日本医史学雑誌第58巻第3号「医師の書簡」(その2) [24] 岩井禎三の項に人物詳細不明とし、又同誌第59巻第1号「医師の書簡」(その4) [69] 外浦文徳の項に人物詳細不明としたが、判明したので下記する。

[24] 岩井禎三

安政5年愛媛県真鍋家に生まれる。岩井家の養子となり明治13年東大別課卒業。東大外科助手、東京医事新誌の編集、15年岩手医学校教師、19年ハワイ日本移民局医長、日赤病院勤務等歴任。大正4年没。享年58。(1858-1915)

[69] 外浦文徳

東京高輪にて内・外科を開業。

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社
1994年11月30日発行
池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎』
上・下巻思文閣出版 2007年2月25日発行
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981
年9月10日発行
吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』より遠藤正
治著「明治期の侍医制度と池田文書」思文閣出版
2001年5月11日発行
大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20
日発行
稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術
1973年5月15日発行

(本稿に於いて詳細不明の医師 寛道・寛世・文
圭・文齋・良齋・レリレルに就きご知見のある方
は順天堂大学医学部医史学研究室までお知らせ下
さい。)